

# 教育新聞

発行所 教育新聞社  
 〒110-0005  
 東京都台東区上野3-17-7  
 代表 電話 03(3832)3571  
 FAX 03(3832)3570  
 URL <http://www.kyobun.co.jp>  
 E-mail [kyoiku@kyobun.co.jp](mailto:kyoiku@kyobun.co.jp)  
 購読料 2625円(月額、税込)  
 振替口座 00170-6-4369  
 ©教育新聞社 2008  
 週2回 月・木発行

## 用水位置を推察させる仕掛け

「それだけのなの？」子どもがつぶやく……。

黒板に描かれた讃岐平野の略図には、上中下と東西に3本の線が引かれているが、そのうちの1本だけが用水の正しい位置なのだ。

用水によって旱魃が無くなくなったことから、子

どもたちは水路が網目のように作られたと思つてい

る。しかし、黒板には色ちがいの3本の線が引かれて

線をそれぞれに付け足した。「それだけのなの？」「そう、これだけ……」「だって、田んぼはたくさんあるんでしょ？」子どもたちの困惑は続く。

「ため池」で最も一般的なものは平坦地に作られた「野池」であり、その多くは江戸時代に作られた。堤防で周りを囲う、その形から別名「皿池」とも呼ばれる。ため池は縦の水路でいくつもが結ばれており、親子池、子池の関係が成り立っている。

しかし、昭和49年、四国山地を貫き吉野川の水を引き入れた香川用水は、宿命ともいわれた讃岐の水不足を一気に解消した。数百年にわたる農民の悲願はここに達成され、線香水に代表される農業慣行も大きく変わった。

授業最大のポイントは、その香川用水が讃岐平野にどのようにひかれたかにある。これが分かれれば「稲作と水の関わり」「先人の知恵」が理解できるのである。やがて、「これだ」と言った子どもを前に呼び、黒板を指させた。彼が指したのは一番山寄りの1本である。

「先生、縦には引かれていないの?」「いや、実は支線があつて、それは南北にこれだけ……」と東西に引かれた線の5分の1程度の

川が無い讃岐平野では、古くから「ため池」による灌漑農業が行われてきた。中でも有名なのは、弘法大師が関わった満濃池で、「ゆるる抜き」の行事は初夏の風物詩ともなっている。

かつては、線香の燃える時間内に一定量を水田に取水したため「線香水」と呼ばれる慣行があつた。しかし、慢性的な水不足は解消されず、雨の少ない年には水争いも起きた。そうした年には、田んぼの表面がわずかに湿る程度、枯死寸前で灌水する「かけ流し」が行われたが、それすら出来ない年もあつた。

教師自身が十分に納得できる自前の教材を持つこと。そうした教材を一つずつ増やしていくこと。それが教師にとっての財産なのだと思ふ。

## 子どものつぶやき

### を生かす 3

玉川学園M.M.R.C遠隔教育推進室研究員

多賀 讓治

満濃池に代表される山地の縁辺部に作られた大型の池は台地の谷間に堰が作られたので「台地池」と呼ばれ概して古いものが多い。

「どうして?」「なんで?」。子どもたちが聞

く。「だって親池に水を入れれば、そのままの池までいくじゃない」。ここで子どもたちは先人が築き上げた「ため池のシステム」が今なお生きていることに気がつくのである。事実、6300ものため池は、1つも潰されずに今日もなお讃岐の水田を潤している。

子どもたちの心を揺り動かすためには、効果的な資料提示と適切な発問が大切なのは言うまでもないが、そのためには十分な教材研究が必要である。